

報 告

## 発達障害支援における子育てサロン活動の実践的研究

— 大学施設を利用した「ママかんフリーカフェ」の実践から —

藤田 久美

Kumi FUJITA

### 1. はじめに

近年、子育て支援施策や児童福祉及び障害児支援の充実に伴い、障害のある子どもと家族が早期からサービスを受けることのできるシステムが充実しつつある。発達障害は育ちの過程の中で発見される障害であり、地域を基盤とした子育て支援システムに包含された保健・医療・福祉・保育・教育等の連携による早期から児を含めた家族への介入・支援が必要である。筆者は、発達障害児の母親支援に関する実践と研究をすすめ、平成13年7月に発達障害児の親の会「ママかん」を発足し、母親支援に関する具体的な実践を行ってきた。このような立場から母親目線のニーズを整理しつつ、発達障害支援システムの構築に向けた実践的研究に取り組んできた<sup>注1)</sup>。

本稿では、平成20年度から取り組んでいる大学施設を利用した子育てサロン活動における実践の成果を整理し、発達障害支援における子育てサロン活動の意義と今後の課題を考察する。

### 2. 発達障害支援における子育てサロン活動の企画に至った経緯と事業概要

#### 1) 発達障害支援における研究から明らかになった課題

発達障害児を育てる母親支援の実践や研究をとおして、母親が有する育児不安は、診断前後から何らかのサービスにつながった後も継続し、家庭生活・地域生活にかかわる悩み・不安が日常的に

あり、母親への支援は継続的に必要であることが明らかになった<sup>注2)</sup>。母親の声から、既存のサービスは、児へのサービスは充実しているものの発達障害児を育てる母親のニーズに特化したサービスは脆弱であり、育児情報の交換や仲間や専門家との出会い、母親同士の相互扶助や専門家へ気軽に相談できる場が必要であることが課題として明らかになった。このような場として、子育て支援事業や社会福祉協議会等で実施されている子育て中の母親を対象とした子ども連れで参加できる情報交換や母親同士の交流の場として子育てサロン活動があげられる。しかし、発達障害児の母親にとっては参加しにくい状況もあり、発達障害支援に特化した子育てサロンを創ることで、発達障害児の母親の居場所、仲間との出会い、気兼ねな相談の場となることが期待できるのではないかという発想に至った。

#### 2) 大学施設を活用した試行事業から

研究によって明らかになった地域課題を整理し、共に活動してきた「ママかん」の協力を得て、発達障害児の母親を対象とした子育てサロン活動を平成21年2月に試行的に実施した。その結果、山口県内各地から発達障害児を育てる母親45名の参加があった。参加した母親からの肯定的評価を得られ、次年度(平成21年度)は3回の事業を実施した。事業評価を行った結果、フリーな雰囲気サロンの要素に加え、診断前の〈気づき〉の

段階で支援できる体制を整備する必要性が明らかになった。加えて、大学施設を利用することにより、大学の教育研究と地域貢献活動を連動させた事業の展開が期待できると考えた。

### 3) 発達障害支援における子育てサロン活動の企画

平成20年度、平成21年度の試行事業の評価をもとに平成22年3月に企画書と広報案を作成し、同年4月より、月1回（平日10時～13時）に開催、事業名は「ママかんフリーカフェ」とした。広報は、障害児支援に関する専門機関、保健センター、児童相談所、小児科医院、保育所・幼稚園などに配布した。作成したちらしには、特に「発達障害」という記述は含まず、「障害のある子どもを育て

る母親」と「発達の気になる子どもを育てる母親」と表現した。発達障害支援におけるママかんフリーカフェの機能は以下の3点である。

- ①発達障害のある子どもを育てる母親の参加を促し、母親同士の交流や情報交換ができるように機能させる。
  - ②発達障害の疑いや発達の気になる子どもを育てる母親の参加を可能にし、専門家への相談や必要な情報を得る場として機能させる。
  - ③発達障害の発見・診断・支援に関係する専門機関や行政機関と連携し、母親支援に特化したサービスの提供ができるよう機能させる。
- ママかんフリーカフェの事業内容については表1に整理した。

表1：事業概要

事業名	地域を基盤とした母親の出会いと交流及び相談の場作り 「ママかんフリーカフェ」
目的	① 障害児、発達が気になる子どもを育てる母親同士が気軽に情報交換したり、専門家や先輩の母親に相談したりできるカフェを運営する。 ② 幼稚園・保育所、学校、福祉事業所、医療。児童相談所等の相談機関、保健センターなどと連携し、インフォーマルサービスとしての母親支援事業として機能させる。
事業概要等	<p>&lt;主催&gt; 山口県立大学社会福祉学部藤田研究室、自閉症児を育てるママたちの会&lt;ママかん&gt;</p> <p>&lt;場所&gt; 山口県立大学地域交流スペースYucca（ユッカ）</p> <p>&lt;事業の特徴&gt; 障害のある子ども、発達が気になる子どもを育てる母親の情報交換できるカフェとして以下を事業の特徴として掲げた。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 診断名のある子どもを育てる母親だけでなく、&lt;気になる&gt;段階から気軽に利用できること</li> <li>② 子どもの年齢をこえた交流が実現され、かつ、子育てに関する有効な情報が交換されること</li> <li>③ 専門家や先輩ママへ気軽に相談できる雰囲気であること</li> <li>④ 子ども（きょうだい児）を連れてくることのできる環境設定と学生ボランティアの協力を得ること</li> <li>⑤ 地域の相談機関・専門機関、保育所・幼稚園・学校との連携を実現し、母親支援に特化したインフォーマルサービス事業として社会資源として活用されること</li> </ol> <p>&lt;スタッフ&gt; 山口県立大学社会福祉学部教員（臨床発達心理士）、地域交流スペースYuccaコーディネーター（保健師）、ママかんスタッフ（自閉症児を育てる母親）、社会福祉学部学生ボランティア</p>

### 3. 結果～平成22年度から平成24年度の実践～

#### 1) 平成22年度「ママかんフリーカフェの実践から

##### (1) 平成22年度の実施結果の概要

###### ①参加者と紹介先

参加した母親は10回で延べ122名であった。子どもの診断名は自閉症、高機能自閉症などの発達障害群が40名、ダウン症3名、未診断が4名であった(図1)。母親の年代は20代～50代、子どもの年齢は、1歳～19歳(幼児20名・小学生18名・中学生5名・高校生4名・高校卒業生1名)であった。

ママかんフリーカフェの情報は、ママかんスタッフの紹介が5名、子どもが利用する知的障害児通園施設(現:児童発達支援センター)・福祉NPOからの情報提供が20名、医療機関2名、保

育所保育士からの紹介が1名、幼稚園教諭からの紹介が1名、保健センター保健師からの紹介が1名、医療機関セラピスト2名、小児科医師から1名であった(図2)。

###### ②ママかんフリーカフェの実際と参加者の様子

参加した母親たちは、テーブルでお茶をのみながら、子どもの障害や発達特性にどう対応したらよいか悩んでいることや利用している幼稚園・学校との関係、家族関係(夫やきょうだい)などの悩みをうちあけながら、相互に交流する姿がみられた。筆者は母親同士の交流や情報交換がスムーズに行くように適時介入した。専門家への相談もあり、育児上の課題を共有しながら、具体的なアドバイスを受けたり、子育ての方法を整理したりする場面もみられた。親の会スタッフ2名は、参加者の悩みに対応し、経験談を伝えていた。母親が連れてきた子どもは、社会福祉学部学生ボランティアが託児を行った。子どもは、入園前の乳幼児が多く、年齢にあった玩具等を準備し、託児環境を整えた(写真1)。

###### ③事業評価の方法と結果

事業評価の方法として、毎回終了後に運営にかかわった専門家2名、親の会スタッフ2名、学生ボランティア5名でミーティングを行い、サロン活動中の母親の様子や情報交換の内容の記録、母親や専門家が応じた相談内容、参加者(母親)の

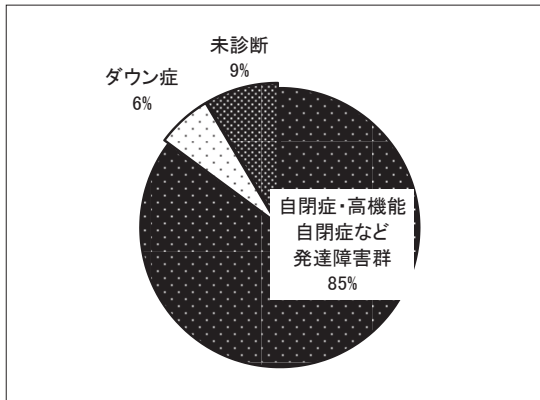


図1：子どもの診断名

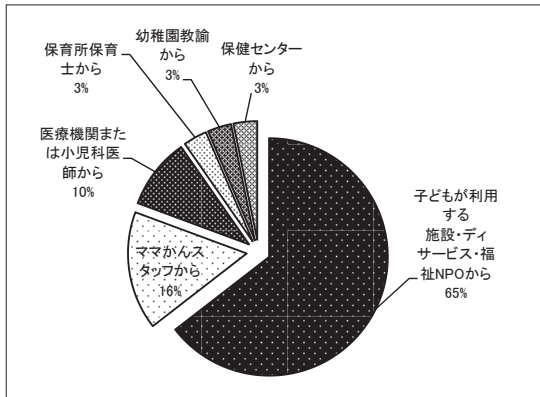


図2：サロン活用の紹介先



写真1：ママかんフリーカフェの様子

感想、スタッフの感想・気づき等を共有した。また、紹介があった専門機関からは、母親の承諾を得た上で、母親の様子・支援内容等を報告し、参加者の紹介を受けた関係機関への電話にて聴き取りを行い、サロン活動運営に期待することや利用者の様子等についての情報交換を行った。

#### <参加者の感想から>

参加者の感想からは、「必要な情報が得られた」「子育てで困っていることの相談ができた」「年代をこえた交流ができた」「ストレスが軽減した」「専門家と直接話ができてよかった」「子ども連れ(きょうだい児)で参加しやすい」などがあった。改善点・要望としては「時間が足りなかった」「もっといろいろな人と話したかったが積極的になれなかった」があった。

#### <連携機関の声>

専門機関からは「1・6健診、3歳児健診後に母親を受け入れてくれる場所があってありがたい(保健センター保健師)」、「幼稚園できない支援をしてもらおう場所として期待している(幼稚園教諭、対象児:アスペルガー症候群、男児)」、「保育所でトラブルが多く、母親がほかの保護者と交流できず孤立感を感じている。同じような悩みをもつ母親と交流してもらってよかった(保育士、対象児、ADHD)」、「先輩のお母さんから知恵をもらって子育ての方法を学ぶ場として期待している(児童発達支援センター、児童指導員)」等の意見が聞かれた。

#### <スタッフのふりかえり>

スタッフのふりかえりから、「年齢をこえた交流ができたのはよかったが席の配置やコーディネートなど毎回柔軟な対応が難しかった」「子どもの問題行動への対応等に母親同士の知恵やアイデアを出し合えたのはよかったが、個別の問題解決には至らないため、必要に応じて子どもが日常的に支援を受けている専門機関との連携を強化することが課題である」等があった。親の会スタッフからは単にアドバイスをすることへの不安があることや利用者の話の聴き方・応え方に関する学習をしたいという要望があった。学生からは、「親

御さんの声を直接聞くことで勉強になった」「母親にとって有意義な時間にするために運営の方法を考えていきたい」等の意見が聞かれた。

#### ④平成22年度の成果と課題

事業評価から、ママかんフリーカフェが、子育て支援機能を果たすだけでなく、専門機関のサービスを補完する役割を担っていることが明らかになった。大学施設を利用したことで学生ボランティアの参加が可能となり、学生への教育効果が高まったと思われた。参加した母親が育てる子どもは、幼児期から青年期まで幅広く、障害名も様々であったが、発達障害群が8割以上を占めたことから、発達障害支援における子育てサロン活動として機能したことが考えられた。平成22年度のママかんフリーカフェの実践から、発達障害支援における子育てサロン活動の成果を以下に整理した。

- 子どもの年齢をこえた交流や子育てに関する情報が交換され、発達障害児を育てる母親が気軽に利用できる地域のサロンとして機能しつつある。専門家や先輩の母親に気軽に相談できる雰囲気があり、個々の具体的な悩みや子育て上の課題に対応できた。
- 大学地域交流スペースの活用により、子どもを連れてくることのできる環境設定と学生ボランティアの協力を得ることができたため、母親が参加しやすかった。
- 地域の相談機関・専門機関、保育所・幼稚園・学校からの紹介があり、母親支援に特化したインフォーマルな社会資源として活用されつつある。

改善点として挙げられた点については、フリーカフェという特性から、個々の悩みや課題の解決に向けての個別相談の時間はとれないが、参加時間内に何らかの方法で解決に向けてのアドバイスを受ける機会や知りたい情報を得ることができるようプログラムの工夫・改善が必要であるということである。今後の課題として明らかになったことは、保健センターから紹介された未診断の母

親への支援として、診断前より母子で利用できるサービスを実施する施設・事業所との連携を強化するための方法を検討することである。

## 2) 平成23・24年度「ママかんフリーカフェ」の実践

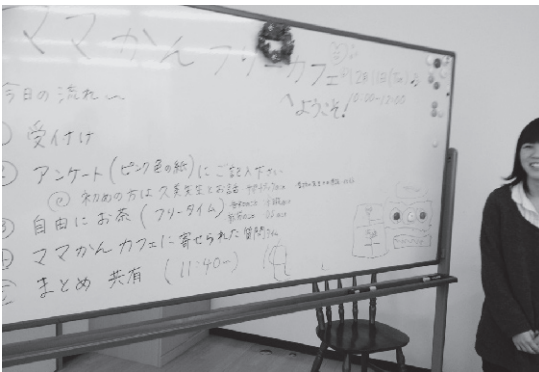
### (1) プログラムの改善・工夫

初年度の実践の成果から、「ママかんフリーカフェ」の継続の必要性を認識した上で、プログラムの改善を行った。事業の目的や特徴は同様であるが、プログラムの内容とスタッフの役割を明確化した。母親が得たい情報や具体的な子育ての悩みについて記述できるシートを準備し、その内容をプログラムの中の「質問タイム」にて全員で共有し、専門家や親の会スタッフから応答ができるようにした。フリーカフェ中は、参加者同士の交

流がスムーズになるよう大学教員（筆者）が全体のコーディネートをしつつ、他のスタッフが、テーブルごとに母親の交流をサポートする配慮を行った。託児は事前にYuccaのコーディネーターに申込みをし、年齢にあった玩具などの準備を行い、学生が子どもの託児を担った。湯茶やママかんスタッフの手作りのケーキを準備し、あたたかい雰囲気の子育てサロンの運営を心がけ、環境作りの工夫を行った。全体の流れはホワイトボードに示し、質問タイムの時は、質問内容をホワイトボードに記し、学生と大学教員が司会進行を行い、参加者全員で共有できるようにした。学生が手作りした「子育て応援メッセージカード」も準備した。全体の流れと内容、スタッフの役割をまとめたものを表2に整理した。

表2；プログラム

流れ	参加者	配慮	スタッフの役割	準備物
受付フリーカフェ	受付後、シートを記入し、ドリンク等を選択し、テーブルに座る。	初めて参加した母親には大学教員が個別に対応する時間を設ける。	<学生スタッフ> 受付を行い、名札とシートをわたす。子どもは学生スタッフに <専門家スタッフ> 初めての参加者に対し、大学教員が面接を行う	名札 ママかんフリーカフェシート等
交流タイムフリーカフェ	<交流カフェ>  <託児コーナー>	同年齢の母親の交流、母親のニーズにあわせて、適時席を誘導する。  地域交流スペースYuccaコーディネーターのサポートのもと、学生スタッフで託児を担う。	大学教員（筆者）、ママかんスタッフは、テーブルにつき、母親の情報交換等をサポートする。 Yuccaコーディネーターは適時、参加者のサポート全般を担う。 ◇平成24年度より、児童発達支援事業保育士スタッフ2名の協力が得られている。	茶菓子 託児コーナー 準備等
質問タイムまとめ	質問タイムに参加する。	シートに記入された質問の内容をもとに進行する。専門家や母親スタッフが答え、全員で共有できるようにする。	学生スタッフと筆者（大学教員）が進行を担う。	ホワイトボード
解散	感想に提出し、子育て応援カードを受け取る。	参加者一人ひとりを丁寧に見送ることができるよう配慮する。	学生スタッフは受付の場で母親の感想を受け取り、子育て応援カードを渡す。	感想シート、 子育て応援カード



## (2) 23年度・平成24年度の実施結果

### ①参加者

平成23年度の参加した母親は延べ112人、平成24年度は延べ96人（平成24年12月現在）である。参加した母親が育てる子どもの年齢は図3、診断名は図4に示した。

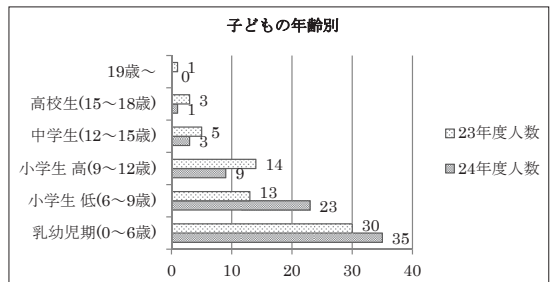


図3：子どもの年齢

### ②ママかんフリーカフェの実際

専門家スタッフとママかんスタッフが同席し、参加者同士の交流が図られた。母親らは、子どもの発達の状況や子育てを通して困っていることや悩みを語りあっている姿があった。また、障害の診断を受けた時の悲しみや苦しみ、周囲の理解が得られないもどかしさ、日々の子育てで抱える葛藤など、様々な感情をはきだす姿もあった。子どもの成長や支援者とのかかわり等、嬉しかったことも報告しあい、笑顔の交換もみられた。利用している福祉サービスの情報や幼稚園・保育所や学校の情報も交換しあう姿もみられた。毎回参加す

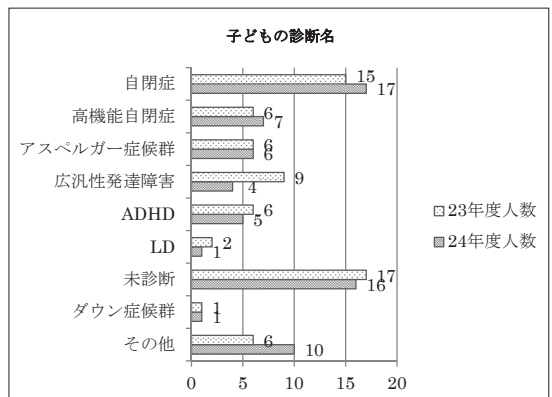


図4：子どもの障害

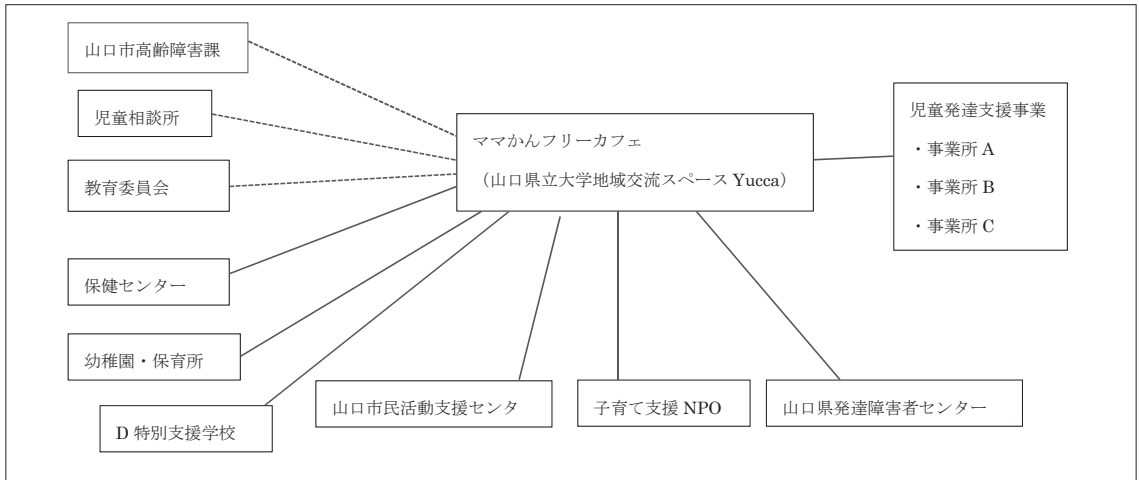


図5：ママかんフリカフェの広報先及び連携図

※広報先は点線、連絡機関・紹介先は実線で示した。

る母親は自主的にテーブルにつき、茶菓子を食べながら交流を深めていた。初めて参加する母親は、支援ニーズを把握し、テーブルに案内し、他の参加者と交流ができるよう配慮された。

全員に配布されるシートに書かれた質問には「偏食のこと」「子育てのいらいらの解消法」「将来のこと」「きょうだい児への接し方」「友人との関係」「本人への障害告知」「休日の過ごし方」「行事への参加」「幼稚園」「就学先の決定」等、多様な悩みや困りごとが記述されていた。質問内容は、専門家や同じテーブルについていた母親に聞く場面もみられた。この内容についてはプログラムの中の「質問タイム」を通して、全員で共有する時間を創ることができた。託児コーナーでは、地域交流スペース Yucca コーディネーターの配慮のもと、社会福祉学部学生ボランティアが、子どもの興味や関心にあわせて遊ぶ姿がみられた。

### ③参加者の感想

「先輩ママとの出会いに力をいただいた（自閉症、4歳男児の母）」「悩んでいるのは自分だけではないということがわかりました。出会いに感謝です。（アスペルガー症候群、7歳男児の母）」「多くの人と交流できるフリーな感じがリラックスできた（高機能自閉症、9歳男児の母）」「就学で悩

んでいることを経験者に相談したらアドバイスをもらって参考になった（高機能自閉症、5歳女児の母親）」などの感想があった。その他「元気になった」「ここに来ることが楽しみで1ヵ月がんばれました」「子どもと学生さんが遊んでもらっていたのでゆっくり話ことができました」「熱心な学生さんが発達障害の勉強をしてくれてありがたい」「学生さんにも話を聴いていただきうれしかった」「毎回、私たちがゆっくりくつろげるようにいろんな工夫をしてくださってありがたい」等の感想があった。

### ④地域の専門機関との連携

サロン活用の紹介先は、ママかんスタッフ、子どもが利用している児童発達支援事業等を実施している児童福祉施設・福祉NPOの保育士及び児童指導員、医療機関セラピスト、幼稚園教諭、保育所保育士、保健センター保健師、市民活動支援センター広報誌、ホームページ（大学、子育て支援情報HP）等であった。

平成23年度からは、山口市内の児童発達支援センター等、乳幼児期の障害児支援サービスを実施している児童福祉施設や事業所と連絡協議会を兼ねた研修会を年2回設け、利用している母親に許可を得た上で、母親支援の内容について共有する

機会を設けた。特に、保健センターで実施される乳幼児健診後の指摘以降、サービスを利用する前の支援、サービス利用後の母親支援の共有化を図り、大学研究室と専門機関の連携を強化することができた。図5に連携図を示した。

#### ⑤発達障害診断前の支援から

「ママかんフリーカフェ」は、発達障害の診断前から利用することができる子育てサロンとして、平成22年度より、未診断の子どもを育てる母親の参加があったが、図6に示したように、毎年増加していることがわかる。参加者は、保健センター保健師から乳幼児健診後の紹介を受けた利用者が毎年含まれているが、平成23年度からは、子育て支援情報誌、市民活動広報誌、大学ホームページの閲覧によって参加した未診断の子どもを育てる母親もいた。これらの母親の参加動機は「発達障害の疑いがあり、心配である。発達障害のある子どもを育てる母親との交流を通し、知識を得たい」「幼稚園から指摘を受け、専門機関で発達検査を行い、発達障害の可能性を指摘された」等である。

未診断の子どもを育てる参加者の感想には「診断はないが発達障害があるかもしれないという不安があったが、専門家や診断のある子どもを育てていらっしゃる方のお話はとても参考になりました（2歳児、女児の母）」「診断のない人同士で話をしたことでこれからのことについて改めて考えることができた（2歳児、男児の母）」等、肯定的な意見があった。一方「確定診断されている方と未診断の方と差を感じてしまい、やはり未診断（あるいは同年齢）からのお子さんの方とお話が盛り上がる。同じような悩みを抱えているせいかもしれない（2歳児女児の母）」とあった。このような声を受け、連携している専門機関と協議し、未診断のママかんフリーカフェの参加者を中心にしたグループカウンセリングの機会を作ることとした。この事業は、筆者の研究課題とも連動させ、地域交流スペースYuccaにて実施した。

平成23年度は、ママかんフリーカフェに参加し

た未診断の子どもを育てる母親3名（いずれも5歳児の子ども）の協力を得て、筆者がファシリテーターとなり、グループカウンセリング形式で実施した、平成24年度は、児童発達支援事業を実施している事業所と連携し、乳幼児健診後の未診断の母親の支援に特化したグループカウンセリングを2度実施し、2歳から5歳までの子どもを育てる9名の母親の参加が実現した。参加者は連携している児童発達支援事業を行っている専門機関からの紹介であり、ママかんフリーカフェの参加者である。参加者らが育てる子どもの診断はないが、ことば等の発達の遅れを乳幼児健診で指摘されている。すでに福祉サービスを利用し、子どもの発達支援を受けながら、医療機関の受診が必要な場合、家族の決断のもと受診し、確定診断を受ける場合もある。参加した母親の中には、診断を受けた直後の母親や、まもなく受診予定の母親も含まれている。グループカウンセリングの感想からは、「ママかんフリーカフェに参加したことがご縁で同じような状況の方と交流できてよかった」「子どもはたぶん発達障害だと思うが、診断を受ける勇気がない。診断を受けた後がどうなるか不安。そんな不安な気持ちを聴いてもらってよかった」「みなさんの気持ちを聴けて自分の気持ちと同じようなものもあり、共感できた」等があった。

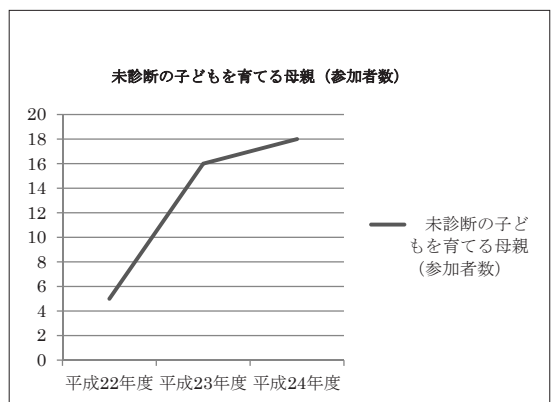


図6：未診断の子どもを育てる母親の参加者の推移



#### 4. 考察～発達障害支援における子育てサロン活動の意義と課題～

「ママかんフリーカフェ」を定期的で開催するようになった平成22年4月より約3年間の実践をもとに成果を整理し、発達障害支援における子育てサロン事業の意義と課題を考察する。

##### 1) 発達障害児を育てる母親同士の交流と相談の場の創造

母親の感想からも、子どもの年齢をこえた交流や子育てに関する情報が交換され、発達障害児を育てる母親が気軽に利用できる地域のサロンとして機能していることがわかる。フリーカフェという形態は、専門家や先輩の母親に気軽に相談できる雰囲気があり、参加者にとって、気軽に参加できる場となったのではないかと考えられる。また、平成24年度からは、児童発達支援事業の保育士スタッフ2名の協力を得ることができたため、専門家が常駐する子育てサロン事業としての機能を強化できたと思われる。プログラムの工夫により、子育てで抱える悩みや課題の解決のための糸口や必要な情報を得ることができたことは、利用する母親にとっても有意義だったのではないかと考える。

##### 2) 発達障害支援システムにおけるインフォーマルな社会資源の開拓

研究成果をもとに明らかになった地域課題を解決するために、大学施設を利用した事業を展開できたことでインフォーマルサービスの開拓が実現したと思われる。3年間で述べ300人以上の母親が参加し、そのうち8割強が発達障害の診断のある子どもを育てる母親であることから発達障害のある子どもを育てる母親のための子育てサロン事業として定着していることがうかがえる。このような実践過程から、発達障害の診断を受ける前の子どもを育てる母親の支援ニーズが明らかになり、そのニーズに合わせた新たな事業を展開することができたことの意義は大きいと考えられる。しかしながら、発達障害の診断前の児と母親支援

のあり方については、専門機関との連携をさらに強化しながら具体的な方法を検討することが今後の研究課題として明らかになった。

##### 3) 行政・専門機関との連携による母親支援

図5で示したように、関係機関との連携が実現した。保健センターとの連携により1歳6ヶ月健診後の発達の指摘を受けた後の母親への支援、幼稚園・保育所、幼児期の発達支援サービスを実施している児童福祉施設や福祉NPO等の事業所においては、地域の家族支援サービスの場として期待され、連携が強化されたと考えられる。また、連絡会議を含めた家族支援に関する研修会の実施により、児童発達支援事業を実施しているA事業所の保育スタッフ2名の協力を定期的に得ることができた。ママかんフリーカフェの参加者に承諾を得た母親支援に関する連絡会議を年3回実施したことにより、連携がより強化できたと思われる。さらに、子育て支援NPOや市民活動支援センターとの連携により、すべての子育てを包含した中で、発達障害支援における子育て支援の仕組み作りが可能になりつつある。このような仕組みは、早期の発達障害の気づき・発見、介入・支援に有効であるといえよう。

子育て支援にかかわる支援者や保育所・幼稚園の保育者らとの連携や研修機会の提供も必要であるため、今後、連携しながら、母親支援の課題を共有することも課題である。

#### 5. おわりに

地域交流スペースYuccaで実施する「ママかんフリーカフェ」は、大学の教育研究活動と地域貢献活動を連動させ、発達障害のある子どもを育てる母親を対象とした既存にないサービスを創造することができた。

課題として挙げられた「未診断」の子どもを育てる母親支援の充実は、保健師や診断前から母子で利用できる児童福祉施設、社会福祉法人、福祉NPO等が担っている福祉サービスを行っている事業所のスタッフとの連携を継続し、児と家族へ

のサービスのあり方を検討していきたいと思う。特に、発達障害児の気づき・発見・診断前後のプロセスの段階から相談対応できる地域の発達障害支援システムの構築に貢献するために母親支援システムの開発に関する研究と実践を継続的に行っていきたいと考える。

### <謝辞>

ママかんフリーカフェの運営は、「ママかん」のスタッフ山下里枝さん、石川和代さん、徳永典子さん、藤田研究室所属学生である社会福祉学部4年の中村朱里さん、渡邊美里さん、久留加奈子さん、濱名佑弥さん、卒業生の岡村香織さん（現：児童福祉施設職員）、地域交流スペースYuccaコーディネーターの杉山美羽さんに多大なご協力をいただきました。託児ボランティアに参加している教職課程3、4年生及び学生ぶちボランティアセンターのスタッフ、元Yuccaコーディネーター河野幸恵さんにも協力をいただきました。平成24年度からは「多機能型事業所ひらきの家子ども通所サービスあぼろ」の白井優子保育士、貞光敬子保育士にも協力をいただいています。ご協力いただいたすべての方に感謝します。

最後になりましたが、大学研究室の運営にご理解いただき、教育研究活動にご理解・ご協力いただいているママかんフリーカフェの参加者の皆さんに深く感謝します。

### 注

- 1) 平成11年より、幼児期の自閉症児と家族の支援に関する研究をすすめ、保育所・幼稚園、児童発達支援センター（旧：知的障害児通園施設）と連携し、研修会や研究を進めている。近年では、平成22年度山口県大学創作研究にて調査を実施し、福祉サービス事業所等が抱えている家族支援の課題を整理した。発達障害児の母親支援システムに関する研究は、「地域を基盤とした発達障害児の母親支援システム構築の過程と課題—インフォーマルサービスの開拓における専門家の役割に焦点を当てて」臨床発達心理実践研究第6巻（藤田久美、2011）に纏めた。
- 2) 発達障害支援の母親に特化した支援のあり方を探求する中で、子育てを支援するための具体的な取り組みの必要性を明らかにしてきた。研究の成果は「幼児期の自閉症児の母親支援に関する研究」山口県自閉症発達障害支援センター「母親支援事業」報告書（藤田久美、2005）、「自閉症児を育てる母親への子育て支援～母親の個別相談をもとにした事例的検討～」山口県立大学社会福祉学部研究紀要第12号（藤田久美、2007）、「発達障害児もつ母親の育児に対する気付きや精神的負担に関する研究—幼児期の子どもと学童期にある子どもの母親の比較—」山口県小児保健研究会第43号（木戸久美子、林 隆、藤田久美、2010）「発達初期の障害児を育てる家族支援サービスモデルの開発」山口県立大学社会福祉学部紀要第17号（藤田久美、2011）等に纏めた。